

2018年6月16日(土)

日本国際経済学会第8回春季大会(北海道大学)

貿易の多様化に関する実証分析

胡 洪濱(京都大学 経済学研究科)

経済成長に伴い貿易品目が一方向的に多様化するという研究がある一方で、中所得水準まで多様化するがそれ以降は再び単一化へと向かうという研究もある。本研究では世界銀行が分類する上位中所得国44か国を対象に、貿易品目の多様性と経済成長の間の関連性を考察する。これにより、高所得国への移行期に比較優位産業が減少する国、一方向的に多様性が増加または減少する国、および無相関の国に分類される。次に、それぞれのグループのGDP成長率・1996年と2014年の比較優位産業の特徴を比較することでグループごとの相違点を明らかにする。これにより、持続的な成長のためには貿易が一方向的に多様化するのがよいか、それとも高所得への移行期に単一化へ向かうのがよいかを調べる。また、貿易多様性に関する逆U字型仮説が満たされる条件についても考察を行う。最後に貿易多様性と経済成長、および地理的要因・制度的要因について回帰分析を行い、貿易を行うコストが低い国は貿易品目が多様化され、結果として持続的で安定した経済発展が達成されると示される。また、内陸国・海岸線100km以内の人口が少ない国は自然地理的な要因で品目が多様化されにくい傾向があるが、関税の撤廃や地域統合など貿易を促進しやすい制度を施行することにより、自然的な要因による貿易の障壁を克服できる可能性が示される。